

再びルーミスシジミへ

20 年ほど前かなりルーミスシジミにのめりこみかなり千葉県へ通ったものである。その時の経験と知見から自分ながらの推察を含めて生態と分布を主とした 2~3 の報告を行ったことがある。その中で一番問題になったのが生活史であった、成虫の多くが採集されるピークや形態、天候等の自然状態から判断して年 1 化~3 化が考えられると述べておいたが、その後の少ない知見の集積から大勢は年 1 化という方向に向かいつつ現在にいたっている。しかしながらまだまだこれといった確たるものも発見されず、その全貌ははっきりしないまま遅々として進んでいない。

当時、まず成虫の採集に精を出し生息地の状況把握を行ったのと同時に、越冬後の♀確保による強制産卵と幼生期の観察にも力を入れたものである。しかし、生活史がはっきりしていないところから時期的に♀採取はいつ頃がよいのかもわからず、乏しい経験と予測による推察により 5 月上旬ころではと判断し何回か挑戦し 3 回の強制産卵の機会を得た、と言ってもその時期には個体数も少ない上に比率では♂個体の方が多く♀を得るのは容易なことではなかった。その上ルーミスはムラサキシジミに比べはるかに気難しく試行錯誤を繰り返しながら 3 回のうち 1 回は未交尾らしく産卵せず、残る 2 回も数卵を得たのみで幼生期を垣間見たという状況でそれ以上何かを試すというまでには至らなかった。

当時の収穫は産卵習性（食樹が伸展し始め越冬芽を覆っていた鱗片が開きはじめたときその内側に産付、したがって♀は鱗片の外側に逆様につかまり産卵する…葉や小枝、袋等にも産卵するが前記が基本か？）と産卵に適した条件として太陽光と風ぬげが必要ということがわかったことである。これはのちにやはり 5 月の♀よりかなりの数を産卵させ大量飼育に成功した鳩山邦夫氏の報告からも同様であったことが述べられている。しかし氏もその新成虫をもちいて以後の観察研究にはいたらなかったようで、新たな進展は報告されてはいない。

現在までに判明したところによると年 1 化と仮定して安房鴨川在の友人たちの言を含めて話を進めると越冬後のルーミスの交尾は 4 月中旬前後であり、6 月上旬くらいまでの長い期間をかけて少しずつ産卵する（これは強制産卵でも確認され、産まない日やまったく動かない日もあり、産んでも 1 回に 1~数卵であることが分かっている）ルーミスの幼生期の期間は非常に短くて速いことも確認済みである。したがって交尾直後産卵のものは 6 月上旬には間違いなく新成虫となって出ているはずである。6 月には新成虫と越冬個体とが入り混じることになる。しかし、不思議なことに 6 月に鴨川の友人たちは成虫を見たことがないという。実際の記録としても 6 月の採集記録は 1~2 しかない。いったいどこへ行ってどのように過ごしているののだろうか？ 7 月になるとバラバラに産卵されたものがほぼ出そろい個体数が増してくる。さすがにここまで生きながらえる越冬個体はないと思われるのでみな新成虫とみて差支えないと思われる。8~10 月の個体数や活動状況は皆様もよくご存じ

でしょう。11～2月頃のルーミスは暖かい日には多少活動するようであるが、越冬状況については詳しくわかっていない。単独越冬かムラサキツバメやムラサキシジミのような団体越冬なのであろうか？この辺のことは今後の研究課題であるが、どうも見聞や全月成虫採集達成の木下氏等の話をもとに考察にすると上記2種とはことなり葉上越冬より幹や太枝での単独越冬の可能性が高い。

3月に入ると暖かい日には樹性の白い花にかなりの数の成虫が集まるという。

さてこれからが本題の再びに入るのである…昨年、ルーミスと騒ぎはじめた？仲西氏に触発されて♀採取に4月中下旬に2回挑戦した。1回は天候が芳しくなく蛭にたかられたのみであった。1回はやっと1頭得たが♂であり蛭多数というわけで失敗、本年の再チャレンジへと続くのである。過去に行った5月では野外でかなりの数を産卵後であることとこちらでのカシ類の新芽調達が難しくなることの2点から4月にしたのであるが、やはり成虫は分散しており数も少なく容易ではないことが判明したので、本年は3月に挑戦とすることにした。しかし、その時期はまだ未交尾である。ともかく雌雄ごっちゃも覚悟し数さえ採れば吹き流しで交尾に挑戦と方針転換したのである。うまくいって多数の新成虫が得られれば交尾（年1化なら絶対交尾しないであろうが…）やどこまで生きるか、仮眠はあるのか等々いろいろチャレンジしてみようと思っている。

ともかくにも年1化とすればシジミチョウでしかも成虫で丸1年生きるという世界的にみてもほとんどないといえるくらい珍しい種となろう。どうも私はいまだにそれが信じられないのであるが…

* 新入会員（宜しく願いいたします）

郷原雅敏 225-0011 横浜氏青葉区あざみ野3丁目27-60 T.F: 045-901-6617

携帯: 090-4380-5567 ML: gohbara@dd.catv.ne.jp

* 住所変更

中村英夫 195-0071 町田市金井町2401-22 T.F: 042-735-4162

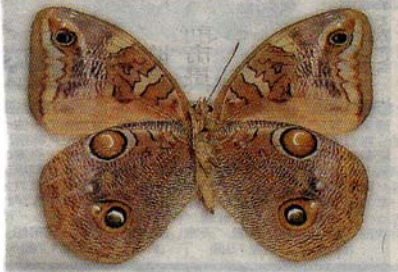
* 橋本栄利氏より寄付として¥4000 いただきました。厚く御礼申しあげます。

* 8月例会は会場の都合により休会となります。お間違いなきようお願いいたします。

3/15(土)13:30～は総会兼例会で斉藤基樹氏の沖縄便りも予定しております。ふるってご参加ください（なお、欠席の方はMLにて委任状を受け付けます、ML会員以外には委任状をお送りしますので、3/10までに必ずご返送ください）なお4～7月までの例会は第3火曜日です。よろしく願いいたします。

新種チョウの命名権 436万円落札

08.1.22 朝日(9)



【ワシントン＝勝田敏彦】米フロリダ大の研究者が、新種のチョウに名前をつける権利をインターネットのオークションに出し、4万800ドル（約436万円）で落札された。命名権売却益は、絶滅が心配されるメキシコのチョウの調査・研究に使われるという。

このチョウは、同大自然史博物館

米大学出品 売却益、珍しい種の調査に

のジョージ・オースティンさんとアンドリュー・ウォーレンさんが昨年、博物館のチョウのコレクションの中に紛れているのを見つけた。メキシコで採集されたフクロウチョウの仲間、羽を広げると10センチもあり、大きな斑点模様の特徴がある＝写真（腹側）、ウォーレンさん提供。

新種の名前は発見者が付けることが多いが、2人は命名権を売って利益をメキシコのチョウの研究や生息地の調査に使うことを思いついた。落札者は、オハイオ州で1972年、88歳で亡くなった女性マージェリー・

ミネルバ・ブライスさんの「5人の孫たちの代理」と称する人。チョウには、ミネルバ・アウル・バタフライ（ミネルバフクロウチョウ）という一般名と、オブシファネス・ブライスキツミラエという学名が付けられ、昨年11月、学術誌に報告された。

日本昆虫学会評議員の藤山静雄・信州大理学部教授は「昆虫の学名に、発見者や世話になった人の名前をつけることはよくある。命名権を売ることもあり得る話だが、種の保全に使うという発想には感心した」と話している。

消える自然のにぎわい

〈生物多様性〉。いやはや、なるとも難しげで、わかりづらい言葉だ。

1992年、ブラジルで開かれた地球サミットで、生物多様性条約が生まれてから15年以上。同時にできた気候変動枠組み条約の目的である地球温暖化問題が、世界の政治課題になったのは対照的だ。

読売新聞の記事データベースで検索すると、気候変動枠組み条約は92～2007年に755本がヒット。これに対して、生物多様性条約は156本しかない。「ある地域における遺伝子・種・生態系の総体」というのが語義だが、これでわかる人がどのくらいいるのか。

この言葉が公式に使われたのは1988年、著書「社

会生物学」で有名な米国の昆虫学者O・E・ウィルソンによるフォーラム報告書の題名としてだった。

米国の研究者たちが守ろうとしたのは、研究フィールドである熱帯のジャングルが次々に破壊されていったから。そして、途上国が条約に盛り込まうとしたのは、ジャングルの生物・遺伝資源を医薬品などに転用して一獲千金を狙う先進国の野望阻止だった。

だが、自然の営みは、そんな人間の損得勘定を超えて心を打つ。命を連綿と受け渡してゆく生きものたちのけなげさ、森が浄化した水のさわやかなど越し、山菜やキノコ、フナずしを食らう愉楽……。目をこらさないと気づかない自然のにぎわいこそが、生物多様性なのだろう。それが今、急速に消えつつある。

(小川祐一朗)

セミの抜け殻を調べることによって、環境の変化を探ることが出来るのが広がっています。セミの抜け殻は、公園などで比較的簡単に見つけれられるので、誰でも気軽に取り組むことができます。東京都内で行われた調査に同行してきました。

(赤池泰斗)

小学生が調査

東京都文京区の小石川植物園は、東京ドームの約3・5倍の16万1588平方メートルにたくさんの草木がある自然豊かな場所です。ここで7月28日、セミの抜け殻調査が行われ、区内の小学生ら約30人が参加しました。

調査を呼びかけたのは文京区の市民たちが作る「環境ネットワーク・文京」です。子どもたちは班に分かれて、日本自然保護協会の自然観察指導員とともに植物園の中を抜け殻を探して歩き回りました。

始めてからすぐに、「あつたー」「見つけた」と、あちこちから声が上がりました。地上から約1メートルほどの茶色の殻がさがついています。

「採る時は、そーとやって下さい。足や履物が取れてしまうと、セミの種類の見分けが難しくなってしまうよ。指導員の注意聞きながら、慎重に採取してビニール袋に入れてゆきます。大きさはアブラゼミかシロアブラゼミのようです。

今度は、根元から30センチぐらいの木の幹に、体長とほぼ同じの小さな抜け殻を見つけた。全体的に丸っこく泥が付いていて黒っぽく見えま

07.2.22

セミの抜け殻で 環境変化探る

「住む場所に異変」の推測も 地中暮らしで影響大



いろいろな種類のセミの成虫や抜け殻



集めたセミの抜け殻を分類する参加者たち

すや大きさは小さく、腹の足形も違いがあらがります。

その結果、ニイニイゼミが半分あり、アブラゼミが46パーセント、シロアブラゼミが27パーセント、指導員の田辺真幸さん(48)によると、昔に入やニイニイゼミが少なくなると、アブラゼミやシロアブラゼミが増える傾向がある。

昨年に行っていた調査に参加した小学2年生の伊藤匠君(7)は10個見つけた。セミをいろんな種類に分けて調べていけば地域の環境変化が分かると思う。姉で小学4年生化を知る手がかかりにもなるわけだ。と話していった。

全国に33種類

日本には33種類のセミがいますが、地域によって住んでいるセミの種類は違います。例えば、東京都内ならアブラゼミ、シロアブラゼミ、ニイニイゼミ、アブラゼミ、ツツクシ

なら、何らかの環境変化があったと考えられます。

地球温暖化の影響でクマゼミの住む場所がどんどん北のほうへ広がっているのではないかと推測する専門家はいるそうです。全国の人が一緒に調べれば、環境の移り変わりが見えてくるかもしれません。